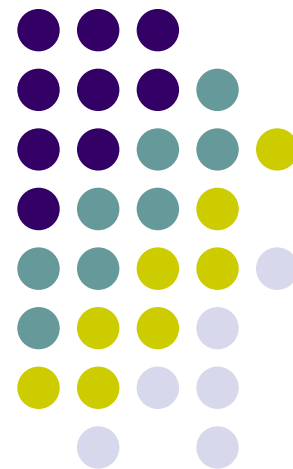


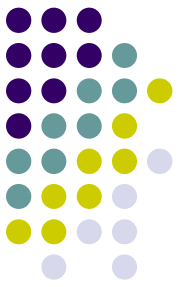
H.18年度 教育学部専門科目
臨床心理学(6)
(臨床精神医学)

教育臨床心理学ゼミ

教育学研究科付属子ども発達臨床研究センター

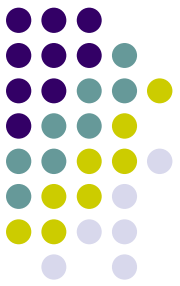
田中 康雄





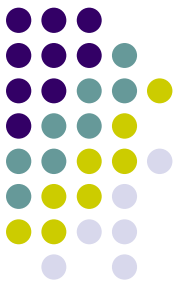
本日の流れ

- 前回の意見への返答
- 事例研修と質疑応答



前回の意見への返答(1)

- 転ばぬ先の杖と案ずるより産むが易し
- **LDの定義**
 - **医療分野のLD: Learning Disorders**
 - 読み, 書き, 計算
 - **教育分野のLD: Learning Disabilities**
 - 聞く, 話す, 読む, 書く, 計算, 推論
 - **社会性のLD: Non-verbal LD?**



前回の意見への返答(2)

- 発達障害の出現率と性差
 - 男性優位 なぜ？
- 早期教育の弊害
 - 外国語の学習例
 - レールを敷くことの是非: 矛盾した気持ち



前回の意見への返答(3)

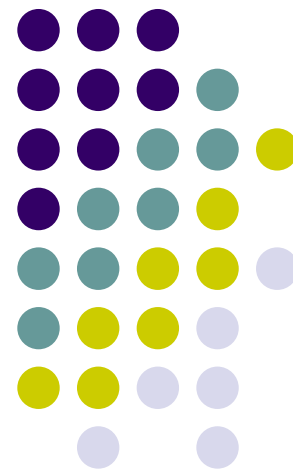
- 診断はどうしているのか
- 増えているのか？
 - 不明, 年次推移のデータはない
- 障害が不利になることはないか？
 - 社会的理解

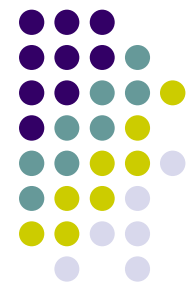
軽度発達障害を診断するための3つの指標



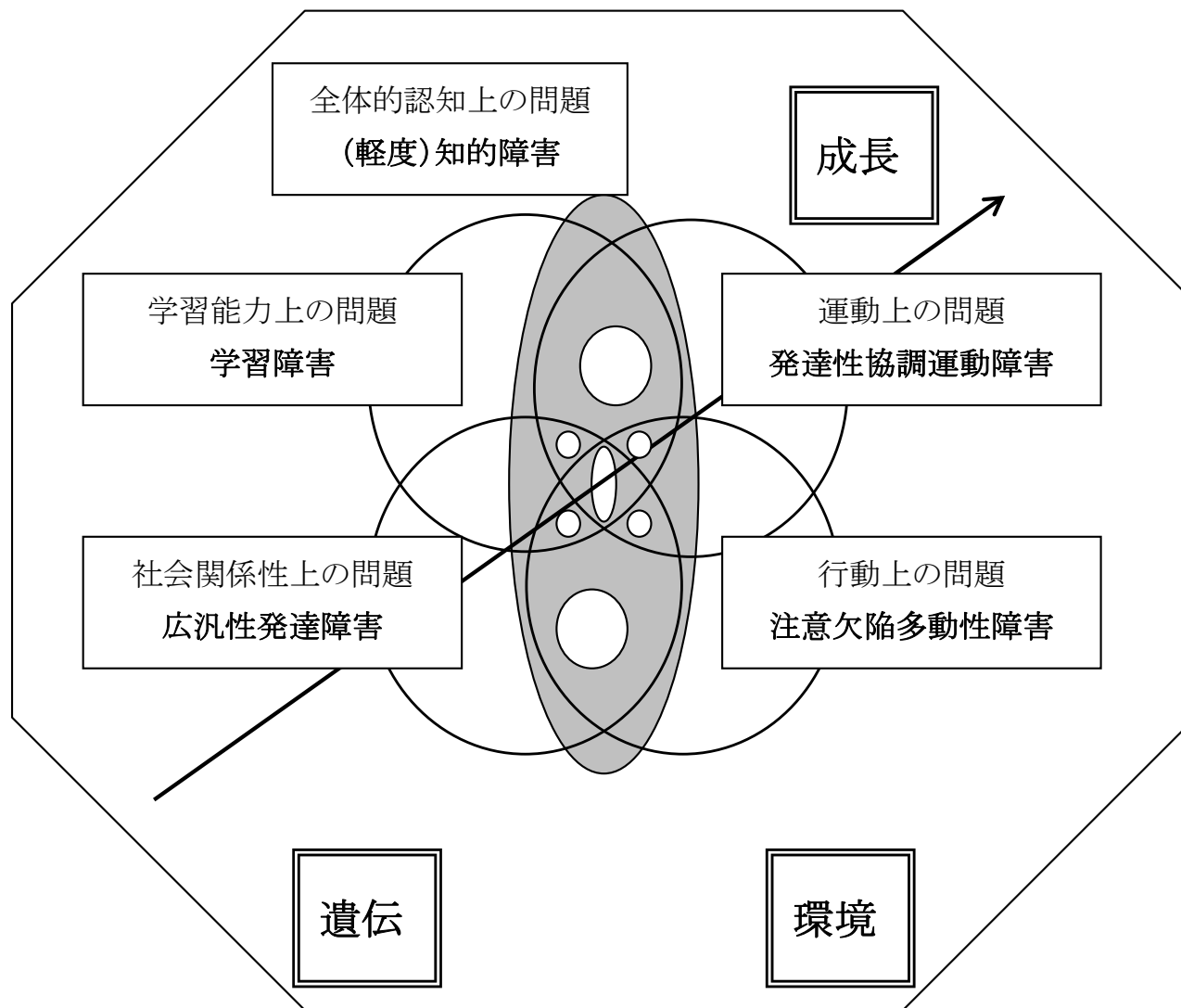
- 客観的指標
 - 操作的診断基準
 - WHOの国際疾病分類(ICD-10)
 - 米国精神医学会による精神疾患診断統計マニュアル(DSM-IV)
 - 障害概念と生活困難度への視点
 - 国際生活機能分類(ICF: International Classification of Functioning, Disability and Health)
 - 構造化面接
 - 心理検査
 - 生理学・生化学的検査など
- 主観的・経験的指標
 - これまでのプロトタイプ, 経験との検証
- 状況的指標
 - 現場での観察, 情報

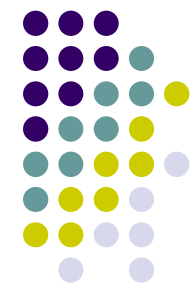
発達障害(2)



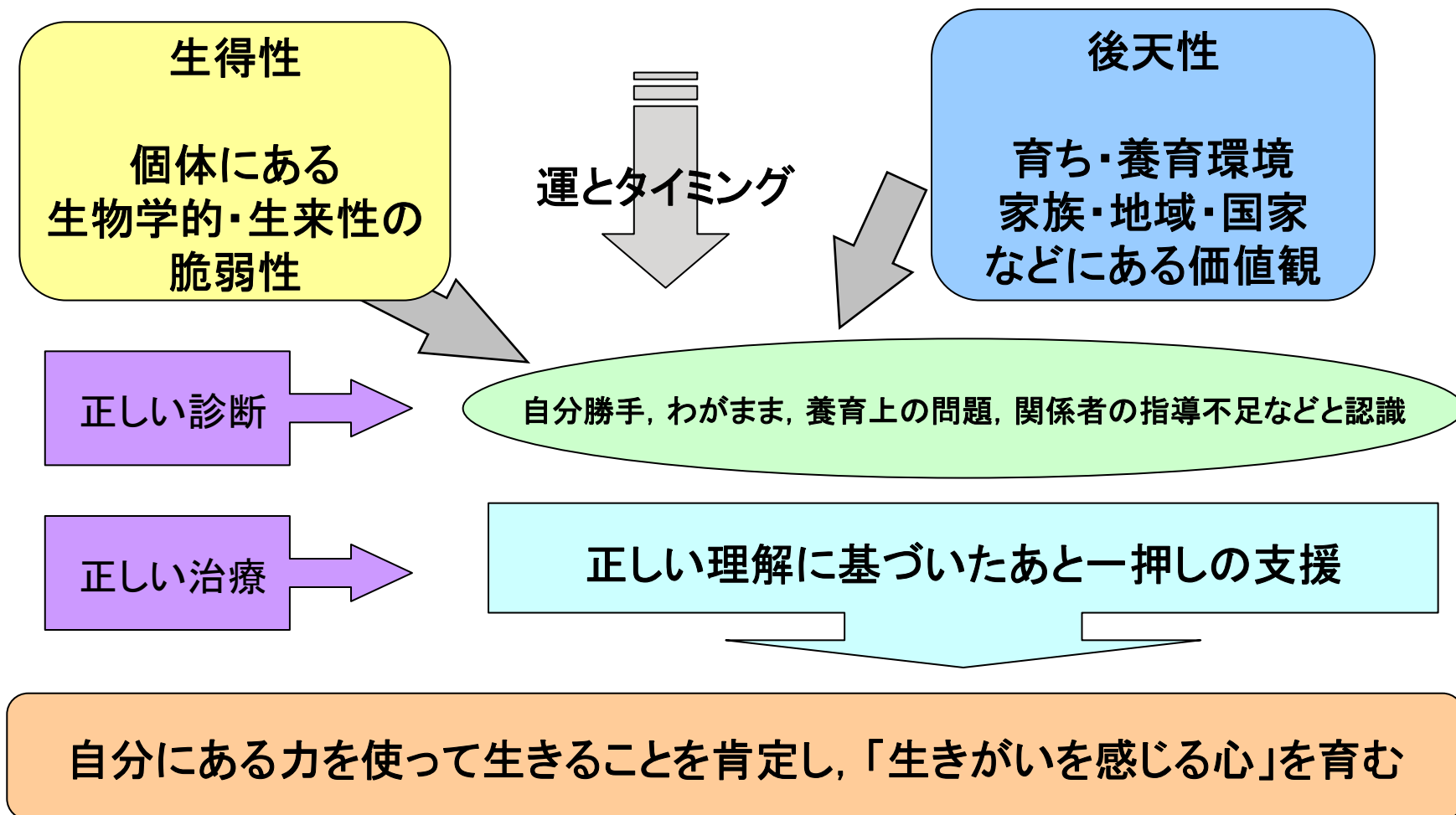


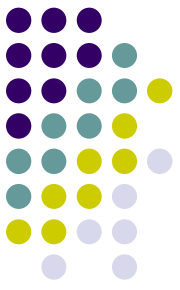
軽度発達障害の認めにくさ





軽度発達障害の顕在・回復モデル





軽度発達障害とは

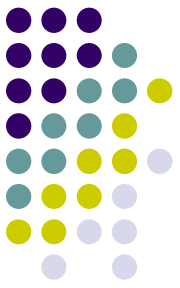
- 人間の一生涯にわたる身体機能, 知的機能, 精神(心)機能に認められる成長・変容の経過を発達とすると, 身体機能, 知的機能, 精神(心)機能に, 「通常」とは異なる何らかの負の様相が現れ, それが一過性に消退せず, その後の成長・変容に何らかの影響を持続的に及ぼしている状態
- 軽度とは, 機能自体は軽微の負の様相であるが, そのため多くの誤解に晒されやすく, 社会生活を行う上での持続的影響は小さい



軽度発達障害が抱える困難性

- この障害がないと想定される子どもたちとの連続性のなかに存在し、加齢、発達、教育的介入により状態像が著しく変化する。
 - 診断、判断の難しさ
- 視点の異なりから診断が相違してしまう。
 - 診察室で見せる子どもの言動は、その子どもの特性のすべてを物語っているわけではない
 - 診断は横断面ではなく、縦断面(時間的推移)で判断する
- 理解不足による介入の誤りが生じ安い
 - 他の障害との見誤り
 - 親のしつけのせい
 - 関係者の指導力不足
 - 心配のし過ぎ、様子を見ましょう
- 二次的情緒・行動障害の問題が生まれやすい
 - 基本症状よりも大きな課題となりやすい

軽度発達障害のある子どもに関わる保育・教育関係者の現状



- 子どものことは、だれよりも理解し、正しく導きたいという強い思いはある！！
- しかし、なにが悪いのだろう・・・
 - この子の問題は軽度発達障害なのか、ただの「わがまま」「甘やかし」の結果なのか・・・『分からない』
 - もし、軽度発達障害としても対応が・・・『分からない』
 - もしかしたら、自分の指導・教授力に問題があるのかもしれない・・・『誰も助言してくれない』『自信がない』
- 途方に暮れ、孤立し、自信とやりがい感を喪失している

軽度発達障害のある子どもの養育者の現状



- わが子のことは、だれよりも理解している！！
- しかし、なにが悪いのだろう・・・
 - この子の「育てにくさ」について、誰も理解してくれない
 - この子の言動(落ち着きのなさ, 一方的でわがままに見える言動, やる気のなさ)は, 皆親である私の育て方のせいだという
 - もしかしたら, 本当にただ「親としての役割」をきちんと示していない私のせいかもしれない
- 気分は落ち込み, 自分を責め, 孤立し, 自信を喪失している

軽度発達障害のある子どもの現状



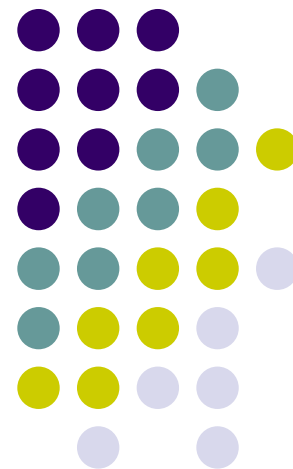
- 僕(わたし)は, 一生懸命にがんばっている!!
- しかし, なにが悪いのだろう・・・
 - また, 遠足の連絡をお母さんに伝えるのを忘れてしまった。気をつけているのだけど, どうして忘れてしまうのだろう・・・
 - 相手が話している内容が理解できない。どうして「なにやっているの!」と言われて, 漫画読んでいたのと正直に正しく答えて叱られるのだろう・・・
 - じっとしているように, ちゃんと話を聞くようにといわれても, がんばって3分しか持たない。ウルトラマンみたいだ・・・
 - 漢字がかけない。いいや, もう, きっと僕がバカだからさ・・・
- もうどうでもいいやと投げやりになり, 自信や将来に対する希望がもてない。生きている充実感もない

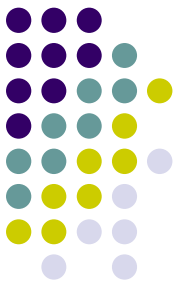
「正しい理解に基づいたあと一押し の支援」を創造するために



- 現状を打破
 - 保育・教育関係者，養育者に対して
 - 今の孤軍奮闘ぶりへの労いと評価，励まし
 - 軽度発達障害に対する正しい情報の提供と，対応策の提示
 - 子ども本人に対して
 - その子にあるよい面への評価，励まし
 - 別な取り組み方などの提示
 - かけがいのない存在であることの強調
- そのためにも「正しい診断」が必要

診断の必要性と課題

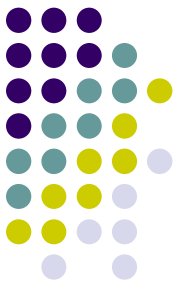




正しい診断とは

- 一面的で単純な,あるいは犯人捜しの誤解を解く役割をもつ
 - 医学モデル的解決(から)
- その人の課題に世界共通の名前が付き(外在化)その人の生き方や人生における考えかた,成長変容の過程,家族の思い,地域社会のあり方などを再点検できる(自己の変革,自己価値の変化)
 - 生活モデル的解決へ

軽度発達障害を診断するための3つの指標

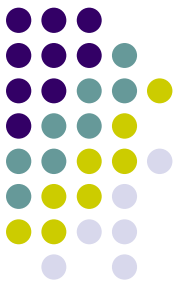


- 客観的指標
 - 操作的診断基準
 - WHOの国際疾病分類(ICD-10)
 - 米国精神医学会による精神疾患診断統計マニュアル(DSM-IV)
 - 障害概念と生活困難度への視点
 - 国際生活機能分類(ICF: International Classification of Functioning, Disability and Health)
 - 構造化面接
 - 心理検査
 - 生理学・生化学的検査など
- 主観的・経験的指標
 - これまでのプロトタイプ, 経験との検証
- 状況的指標
 - 現場での観察, 情報



診断命名の意義(1)

- 養育者と関係者にとって,
 - 子どもにある特徴が, 一定の距離を置いて向き合うべき特性であること
 - それぞれの「関わり」の失敗から始まったことではなく, 「関わり」の難しさに気付かなかったことであること
 - 正体を知れば, 関わりの作戦は「できること」からでも立てることができること
 - などを提示できる



診断命名の意義(2)

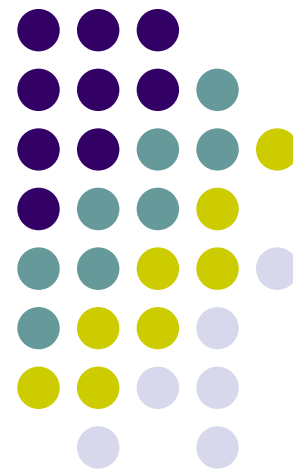
- 本人にとって,
 - あなたにある特徴は、決して「わざと」「周囲を困らせようとして」いるものではないということ
 - 結果的に「叱られる」ことや「失敗」体験から、すべてを今すぐには出来なくとも、必ずよい方向を指し示す作戦があること
 - こうした躓きやすさをもつ子どもは、あなただけではないこと
 - 短所ばかりに目を向けると、ついつい見失ってしまうが、あなたには、とても素敵で個性もたくさんあること
 - 周囲の人たちを一人でも多く、味方につけることが大切であること
 - などを提示できる

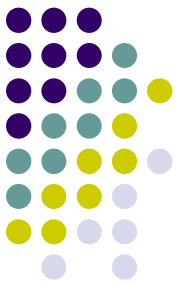


診断の現状

- 軽度発達障害の診断のむずかしさ
 - ソフト面
 - 軽度発達障害のある子どもたちの示す言動のバリエーションの多さに比肩するような診断基準，治療指針が整備しにくい
 - 学際的調査研究が未整備
 - ハード面
 - 児童青年精神科医，小児精神神経科医の少なさ
 - 必要な他職種との学際的連携のもてにくさ(人材の少なさ，時間の共有の困難さ)

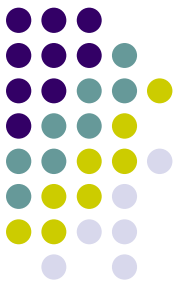
治療の必要性と課題





正しい治療とは

- 狭義には「病気, ケガを治す」対応
- 軽度発達障害は病気やケガではなく, 一生つき合う自己の一部(個性)
- (軽度)発達障害に対する「治療」とは, 「その人にある力を使って生きることが肯定される」こと, その上で「生きがいを感じる心」が育まれるような「正しい理解に基づいたあと一押し」の支援



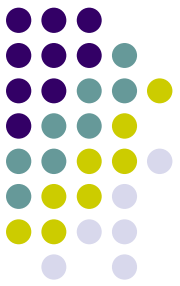
軽度発達障害への対応

- 障害理解に向けて
 - 家族ガイダンス, 家族教室
 - 関係者への説明, 研修
 - 本人への説明(自分自身への理解)
 - 社会的理解(啓発)
- 生活上の困難さの軽減に向けて
 - 環境調整
 - 薬物療法
 - 心理療法
 - 認知行動療法



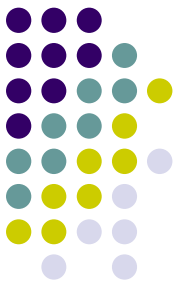
対応の障壁となるもの(1)

- 人材・機関の不足
 - 適切な人材養成を！
 - 生涯支援にかかる人材がいない！
 - 相談機関がない！
- 治療方法(行動療法, 薬物療法,ペアレントトレーニングなど)への過大・過小評価
 - 万能な治療はない
 - 正しい情報が不足している
 - 民間療法や様々な対応方法が流布している
 - 治療効果についてのエビデンスがあまりにも少ない



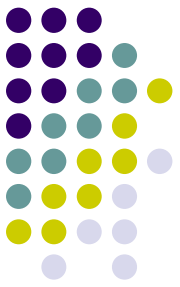
対応の障壁となるもの(2)

- **医学モデルにある課題**
 - 発達障害そのものへの経験不足
 - 正規の治療プログラムの確立困難
 - 理論(研究)と実践(臨床・生活)の解離
- **生活モデルにある課題**
 - 障害そのものの理解不足, 誤解
 - 特別な支援(スペシャルサポート)と当たり前の支援(ナチュラルサポート)の共存を支える社会的理解の不足



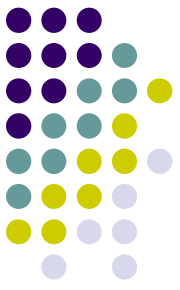
今一度，治療の必要性を問う

- 障害を治すのではなく，状況，関係性を修復すること
- 子ども一人ひとりに近づき，心に触れ，心を認め，育ちを信じること
- 自分にある力を使って，「今をともに生き，共有する世界を立ち上げる」事が肯定されること



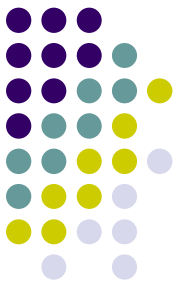
AD/HDと診断された子ども(1)

- 授業中にひとり騒々しく過ごす少年
 - ドイツ人新聞記者のコメント
 - この子の「積極性」は、国際社会を生き抜いていくためには必須の能力であるという賞賛
- シンガポールのインターナショナル・スクールで自己肯定感を学んだ少女
 - いじめられていた子
 - 高めるべき点は、「自己評価」
 - 「私はこの眼鏡が好き」
- リタリン(塩酸メチルフェニデート)が奏功した少年
 - 僕の本当の力が出たのさ、薬は本当の力が必要な、ここぞという時にだけ服用するよ
- 治るんかなとつぶやく少年
 - 自らにある障害(特性)を無きものにするのが治るということなら、自分自身への評価をどこにおいたらよいのだろう、自分が否定されることにならないだろうか？



AD/HDと診断された子ども(2)

- 授業中にひとりうろうろと歩き回る少年
 - この子はAD/HDと診断されているので、歩き回らないといけない子です。注意するべきではなく、自由に歩き回らせておくべき子どもなのです。
 - これ以上は医療で面倒を見てもらってください。
 - 学校で出来ることは、なにもありません。
- 医療の社会化, 学校の医療化



最後に

- 発達障害とは成長する障害であり、生き生きと生きることが障害されるようであってはならない
- 障害への対応とは、どんどんと出来ることが増えること、問題を克服していくことが目標ではない
- 自分の応分の力で「適当にやりすぎしながら」前向きに、しかし、密やかな、ささやかなよろこびを持ちながら生きることである(応分な力としての自己理解のために、正しい診断と治療的介入が求められる)
- 「生きること」、それを個としてではなく、育ちあい 学びあい 支えあい、赦しあうという共生の、お互い様の関係性のなかで成立させていくことである